

バスジャック

沢木祐次 (23)
丸杉源三 (75)
日原しおり (23)
大東捷彦 (28)
太刀掛 (30)
刃振 (28)

橘結佳

○祐次アパート・風呂場

祐次(23)と源三(75)が向かい合ってお風呂に入っている。異様な光景。

祐次「じじいいつまでこんな生活続けるんだよ」

源三「会いに行くのが怖いんじゃない」

祐次「ばあさんに会いたくてあの世から戻ってきたんじゃないかねえのかよ」

もじもじしている。

祐次「恥ずかしがってんじゃないよ」

源三「この話をしたかの？」

祐次「？」

源三「中華丼にうずらの卵が乗ってるじゃろ？」

祐次「中華丼？」

源三「ばあさんな、それを最後に食べるのが好きで、いつものように残しておいたら、孫が来てちようだといって言っただけじゃなかったんじゃない」

祐次「またばあさんの話かよ！」

源三「その時のばあさんの顔ったら（思い出して幸せそう）」

祐次「もおばあさんの話はたくさん！」

源三「ばあさんは何でわしの死に際にあんなこと言ったんじゃない」

祐次「しらねえよ！とにかく早く俺の体を俺に返して天国に帰れよ」

源三「あんたには悪いと思つとるんじゃ」

源三立ち上がり風呂から出ようとする。

祐次焦る。

祐次「おい！水から出ると俺がどうなるか…」

源三が浴槽から出た瞬間、浴槽の中から人が消える。

祐次（中身源三）浴槽が無人になっていることに気付いていない。

祐次（中身源三）「わかつとるんじゃが…」

突然、右手が暴れ出し、体を激しく叩きだす。

祐次（中身源三）「痛い痛い痛い」

右手は髪の毛をつかんで引つ張る

祐次（中身源三）「おおおおお」

祐次（中身源三）、風呂の中から人が消えてることに気づく。

ハッと、浴槽の中に入る。

源三と祐次のからだが出現。

祐次おこっている。

祐次「じじい！」

源三「うっかりしとった」

祐次「うっかりじゃねえよ！水から出たら俺の体は俺の体じゃなくなっちゃう

んだぞ？」

源三「悪かった」

祐次「水ら出たら俺の体はあんたのものになって、俺は自分の右手しか動かせないんだぞ？」

源三「わかる」

祐次「わかるじゃねえよ！」

源三「いじける。」

祐次「(呆れる) もういよ。さっさとばあさん会いに行きやいいんだろ」

源三「怖いんじや」

祐次「しらねえよ」

源三、不安そう。

祐次「ばあさんに会えたら出てつてくれるんだろな？」

源三「わかつとる…」

○祐次のアパート

祐次(中身源三)服を着ている。

出かけようと玄関に向かう。

ドアを開けようとして、髪の毛引っ張られる

○祐次アパート・風呂場

浴槽の中にいる源三と祐次。

祐次「言っただろ？ビデオデッキを持ってって！今日中に届けなきゃ大変なことになるって言ったよな？俺にだってやることあるんだよ！」

源三「怪訝そう。」

祐次「なんだよ？」

源三「ビデオデッキって中身は何じゃ？」

祐次「なんでもいいだろ？」

源三、怪訝そう。

源三「いいから！ちゃんとやってくれよ！」

○祐次のアパート

祐次（中身、源三）アパートのドアから出る。
風が吹く。

祐次（中身、源三）外の世界を感動したように見渡している。

○路上

歩いている祐次（中身、源三）
影から源三を見ている太刀掛、刃振。

祐次（中身、源三）気づいていない。

太刀掛、刃振出影から出てきて声をかける。

太刀掛「（ビデオデッキ指差して）それ」

祐次（中身、源三）ビデオデッキを見る。

祐次（中身、源三）「これか？」

太刀掛「そう」

太刀掛、手を差し出して叩いている。

祐次（中身、源三）右手が焦ったように暴れ出す。祐次（中身、源三）の体を叩く。

祐次（中身、源三）わけがわからない。

祐次（中身、源三）「いたいいたいいたいいたいいたい」

祐次（中身、源三）の右手が髪の毛思いつきり引っ張る。

太刀掛「訝しそう」「何やってるんだよ」

髪の毛さらに強く引っ張られる。

祐次（中身、源三）「いたいいたいいたいいたいいたい」

太刀掛、だんだん苛立ってくる。

祐次わけのわからずとりあえず走り出す。

太刀掛、刃振、慌てて追いかけて行く。

追いかけられて、祐次（中身、源三）逃れる。

細い道に入っていく。

振り返ると後ろから刀掛、刃振が追ってくるのが見える。

祐次（中身、源三）さらに走っていく。

だんだんとなぜか嬉々とした表情。

後ろから刀掛、刃振が追いかけてくる。

祐次（中身、源三）「腰！腰が痛くない！」

角を曲がったところで行き止まりなのに気づく。

祐次（中身、源三）小さな古本屋があるのに気づく。

入って行こうとするが、右手で体を殴られる。

祐次（中身、源三）、たたかれてびっくりするが、走ってきた方を見つめると、決意し揺れている右手を左手で押さえつけ、本屋に入っていく。

○本屋

揺れている右手を抑えた祐次（中身、源三）入ってくる。カウンター座っていたしおり顔を上げる。祐次（中身、源三）の姿に気づくとハッと顔をする。

祐次（中身、源三）「助けてくりよ！」

そういうと慌てて、古本屋の奥の方にかけていく。

しおり、驚いていたが、呆れたように祐次（中身、源三）が消えた方に目をやる。

そこに勢いよく太刀掛、刃振が入ってくる。

しおり驚いている。

店内を見渡す太刀掛、刃振。

しおり「いらっしやいませ」

太刀掛「男が来なかった？」

しおり、わからないふりをする。

しおり「…男？」

太刀掛、刃振見渡している。

祐次（中身、源三）、古本と棚の隙間に隠れている。

しおり「いえ、今日は誰も。もう閉めようと思ってたんです」

太刀掛、しおりをジロツと見る。

しおり、微笑んでいるが厳しい目つき。

太刀掛、にやつとすると店内から出て行く。刃振たちも続く。

シンとした店内。

祐次（中身、源三）がゴソゴソと出てくる。

しおり、厳しい表情で祐次を見ている

祐次（中身、源三）「申し訳なかった。かたじけなし」

右手が祐次の頭を殴る。

祐次「おっ」

しおり「なにそれ？ふざけてるの？（冷たい口調）」

祐次（中身、源三）驚き顔を上げる。

しおり「まだそんなことしてるの？」

祐次（中身、源三）「？」

しおり「あなたはやっぱり最低」

祐次（中身、源三）動揺している。

祐次（中身、源三）、わけがわからずに人差し指で自分を指し、自分のことかと尋ねる仕草をする。妙に間抜け。

右手が思いつきり頭を殴る

祐次（中身、源三）「おっ」

しおり呆れた冷たい目で祐次（中身、源三）を見ている。

しおり「さいてー」

しおり店の奥に消えていく。

○怪しいバー店内（夕方）

祐次（中身、源三）と大東が向かい合っている。大東はビデオデッキの中から、白い粉が入った袋を取り出す。

中身を確認し、祐次（中身、源三）を見てニヤツとする。

○公園（夕方）

人気がない公園。あたりは薄暗くなってきた。

水がだらしなく漏れている寂れた噴水の中に、祐次（中身、源三）と源三が浸っている。

祐次うなだれている。源三もなんだかぐったりしている。

源三「さっきの粉みたいなのはなんじゃ？」

祐次「関係ねえ」

間。

源三「悪かったの。あんたの好きな子じゃとは思わなかった」

祐次「好きとは言ってない。幼馴染だって言ったんだよ」

源三「あの子が言ってたあんたがやってることってさっきの白い粉みたいなのが関係してるんじゃない？」

祐次「…」

祐次元気がない。

源三「そんなに落ち込むんじゃないやったらどうしてそんなことやっとなるんじゃない？」

祐次「やってもやっつてなくても結局同じだよ」

源三「どうゆうことじゃ？」

祐次「…」

源三「…」

源三「何のことかわからんけど、後悔するぞ。わしみたいに」

祐次、噴水から立ち上がる。

祐次「もういいよ。はやくばあさんに会いに行こう」

源三「待って」

祐次「なんだよ」

源三「…怖い」

祐次「…こわくたって仕方ねえだろ？」

源三、うつむいて黙っている。

源三「わしな、昔な、ワインが好きでな、太りすぎで健康診断で引っかけたことがあったんじやよ」

祐次「？」

源三「そんな、ばあさんが言ったんじやよ『ダイエットの秘訣は、ワインを一杯飲んだ後はボトルをしまっちゃうのよ』って」

祐次「なんの話だよ？」

源三 「可愛いじゃろ？この言葉の可愛さ伝わるじゃろ？」

祐次 「伝わらねえけどなんの話だよ？」

源三 「そんな日々が確かにあったんじゃ」

祐次 「…(困っている)」

源三 「明日の12時までじゃ」

祐次 「12時？」

源三 「この世でばあさんを感じられる期間じゃよ」

祐次 「…」

源三 「ばあさんはわしのこと愛しとらんかったと思うか？」

祐次 「(困っている) そんなの俺にわかるかよ」

源三 「死に際にはあさんはいったんじゃ」

祐次 「もういいよ。何百回も聞いたし」

源三 「そうじゃな」

祐次 「…(居心地が悪そう)」

源三 「ばあさんはいったんじゃ、わしのことなんか愛してなかったって」

祐次 「…」

間。

源三 「明日でいいかの？」

祐次 「何が？」

源三 「ばあさんに会いに行くの」

祐次 「……」

源三 「もう少し知りたくないんじや……」

祐次 「……いいけど」

○祐次のアパート（夜）

祐次（中身、源三）が、お弁当を食べている。

祐次（中身、源三）「うまい。うまい。コンビニはすごいの」

祐次（中身、源三）、思い出したようにハツとして手を止め、コンビニの袋からA4の封筒と白紙の用紙を取り出す。

祐次（中身、源三）「忘れとった。さっき買ったんじや、そのほら、さっきの本屋の子に手紙を書いたらいいんじやないかと思っとな」

紙を出していて、並べる。

祐次（中身、源三）「わしもよくばあさんに手紙を書いたな。どうしてA4封筒なのってばあさんがいうから、ばあさんへの思いは折りたくないんじやよって言ったらばあさん喜んでった（幸せそう）」

祐次（中身、源三）思い出に浸っている。

祐次（中身、源三）「だからいいかと思つての」

静かな部屋。

○祐次のアパート（深夜）

祐次（中身、源三）横向きの変な体勢で眠っている。

傍らには空になったお弁当が転がっている。

祐次（中身、源三）の右手が動き、布団の横に転がっている鉛筆をつかむ。文字が書かれていく。

『じじい！あんたは何もわかってない！あの女は俺に興味なんてないんだぞ！
どんな俺にだって…』

祐次（中身、源三）の右手が止まる。

鉛筆の先がもじもじとうごく。

変ないびつな丸などがうじうじと書かれていく。

書いている手が再び止まる。

右手は、鉛筆を置き消しゴムに持ち変えると、すべての文字を一気に消す。

思い直したようにゆっくりと書きだそうとしてやめる。

新しい紙を取り出す。

新しい紙を手で撫でて伸ばすと、ゆっくりと文字を書き出す。

『しおりへ』

そこまで書き手は止まる。

再び消しゴムを持ち消す。

真っ白な紙。

祐次（中身、源三）の顔。

静かに眠っている。

○祐次のアパート（早朝）

祐次（中身、源三）がめをさます。

寝ぼけがお。

祐次（中身、源三）、ふとベットの横を見る。

そこに置かれている紙に気づく。

祐次（中身、源三）その紙に視線を落とす。

祐次（中身、源三）、小さく笑う。

END